

Title	生きすぎたりや六十五
Sub Title	
Author	渡辺, 茂(Watanabe, Shigeru)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2013
Jtitle	哲學 No.130 (2013. 3) ,p.i- ii
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集：渡辺茂君・増田直衛君退職記念
Genre	Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000130--007">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000130--007</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 生きすぎたりや六十五

渡 邊 茂

慶應義塾に奉職して 40 年になる。それ以前に 19 年間この学校に通っていたので、幼稚舎の門を入れて以来、およそ 60 年を経て初めて慶應義塾を離れることになる。そのこと自体にそれほどの感傷はないが、よくまあ飽きずにいたものだと思う。

大学教授に「自分が平均以上の教授だと思うか」という調査をしたところ 94%の教授が自分は平均以上だと回答したという。たしかに、どう見ても並以下の先生がそれを恥じるでもなく堂々としているので、大学教授とは随分特殊なメンタリティの人種なのだと思う。僕自身のそのような判断のバイアスを勘案しても、まあ人並み以上には研究もし、研究者も育てたので（こちらはまことに素材に恵まれたというべきで多くの優れた人材を学問の世界に送った）、とくに思い残すことはない。

研究活動はその多くを英文で出版しており、検索しやすいと思うので興味のある方はそちらを見ていただきたい。僕は 40 年間、もっぱら動物実験をしてきた訳だが、飼育室と 1 部屋の実験室でスタートしたもの（今の北館の位置にあった）が現在は飼育室 3、実験室 15（301.44 平方メートル）になっている。僕が学生のころは動物実験室と呼ぶ人はまれで、もっぱら「鳩小屋」と呼ばれていた。なにぶんバラックであり、野良猫が入り込んで鳩を食べる、といったことさえあった。現在の実験室からはちょっと想像できない。

慶應の心理学はもっぱら行動実験で動物を殺すような実験は行われていなかったが、僕は脳損傷などの生理実験を始めた。そこで、教員になってからすぐに「動物慰霊祭」を行うことにした。僕は塾高の時に生物学研究会というクラブに属しており、そこでは解剖したあとのネズミやモルモッ

トを埋める時に合掌することが習慣になっていたのです、いわばその習慣を踏襲したのである。今は、屍体は業者に処理を委託しているが、年に一度は皆で線香を焚き、実験に供された動物に感謝することにしている。これは是非、今後も続けて欲しい。

米国の大学にいた時に、毎週のようにセミナーが開かれ、その後にワインとチーズくらいの簡単な会食があった。しばしばジョブトークを兼ねていて、会食会場の隅で、トークの印象や講演者の可能性をこそこそ訊かれたのを憶えている。日本に帰ってから、バイオサイコシンポジウムとしてこのような小学術集会を不定期に開くことにした。講師は高名な研究者の場合もあればポストクラスの若手の場合もあり、謝礼もその時の懐次第で出したり出さなかったりだが、140回近くになっているので、これも是非続けて欲しい。若い研究者はともすれば籠城主義になりがちで、ちょっと専門が離れると全く興味を示さない。もちろん自分にも覚えのあることである。このような小集会は効率的に周辺領域の最先端知識を得ることができるので是非活用して欲しい。

もうひとつ僕が在職中に始まったことに印東太郎賞がある。これは塾が誇るワールドクラスの研究者であった印東教授のご遺志による資金によって設立されたもので、隔年で若手の心理学関連の研究者に授与される賞である。僕が第1回、第2回の選考委員長を務めたが、これも資金の続く限り維持して欲しい。

いわば恒例で退職教授の特集号が編纂された訳だが、普段、ハイクオリティの雑誌に論文を発表されている方に、権威はあるもののいささかローカルな雑誌に投稿を依頼することにはいささか躊躇した。幸い、多くの方に投稿していただき、感謝の念に耐えない。また編纂の労を執られた大森さんにも心より感謝したい。職業としての大学教員には定年があるが、天職としての研究者には定年はない。道半ばで生命は果てることは百も承知、その時まで軽やかに舞い続けるつもりでいる。